YOKOHAMA HISTORY MUSEUM NEWS

横浜市歴史博物館

NEWS 11
2000・12

◇企画展・特別展　古墳からのメッセージⅠ・Ⅱによせて
◇今のくらしと昔のくらし－企画展「くらしと道具の百科事典」を終えて－
◇＜研究余話＞秀吉襲来－豊臣方による関東侵攻の実態－
◇収集・収蔵資料の紹介［12］富士両道一覧之図
◇＜常設展示室探検＞マジックビジョン
◇＜史跡散歩＞畠山重忠の史跡を訪ねて－鶴ヶ峰界隈－
◇ちょいとミュージアムショップたいむ
◇＜知ってますか？＞休憩室

●通史展示室　近世　宝久丸

企画展・特別展

古墳からのメッセージⅠ・Ⅱによせて

三世紀の後半頃から、土を盛り上げた巨大な墓である古墳が造られはじめました。それは、列島の王をはじめ各地域のリーダーの墓であるとともに、彼らの権威の象徴であったのです。古墳は、時代の推移とともにその姿を変えてゆき、様々な移り変わりをみせることになります。また、古墳に納められた鏡、各種の石製品、武器・武具、馬具などの副葬品も、ヤマト王権の中心部とその他の地域、あるいは時代によって差があり、特色ある様相を呈します。これらの古墳とその副葬品は、古墳が築かれた時代のヤマト王権と各地域との関係、各地域の政治・社会の姿などを浮かび上がらせてくれます。

横浜市歴史博物館では一月の後半から五月の前半にかけて、「古墳からのメッセージ」として、古墳とその時代に焦点をあてた企画展、特別展を連続して開催します。

まず、「古墳からのメッセージⅠ」として、一月二七日（土）から三月一一日（日）まで企画展「横浜の古墳と副葬品」を行います。

横浜市域に初めて古墳が造られるのは、近畿地方などの中心地域から遅れること約一世紀、四世紀後半頃のことです。前期の古墳としては鶴見川下流域の観音松古墳、中流域の稲荷前一六号墳、虚空蔵山古墳、柏尾川中流域の東野台古墳群などがありますが、鏡をもつなどヤマト王権との結びつきをみせる古墳もあります。古墳の多くは横浜市域を代表する河川の流域の耕地を経済的基盤として造られ、それぞれに展開していきます。武器・武具などの副葬品、様々な形の埴輪などに地域の差や特徴がうかがわれます。六世紀には、丘陵の斜面に横穴墓が造られはじめ、八世紀頃まで引き続き造られていくのも横浜市域の特徴の一つです。

市域には、巨大なものはありませんが、九〇基余の古墳と一〇〇か所余りの横穴墓群の存在が知られます。企画展では、これらの市域の古墳と横穴墓群の中から主要なものをピックアップし、発掘調査の成果をその遺物を中心に紹介いたします。横浜の古墳と横穴墓には華やかな副葬品は多くはありませんが、地域における古墳の消長とその特徴を理解していただければと思います。

続いて、「古墳からのメッセージⅡ」として、三月三一日（土）から五月六日（日）まで、特別展「大古墳展・ヤマト王権と古墳の鏡」を開催します。

古墳が造られた時代、列島の中心となるヤマト王権は鏡、石製品、甲冑、馬具などを権威の象徴とし、それらを高度で豊富な副葬品として古墳に納めたのです。それらの品々はヤマト王権の様相を如実に語ってくれます。

この特別展では、これまでの古墳の調査と研究に大きな役割を果たしてきた、京都大学と奈良県立橿原考古学研究所が有する代表的な古墳の資料が初めて同時に展観されます。特に注目すべきは、「卑弥呼の鏡」であるかどうかで議論のある三角縁神獣鏡を三〇面以上も出土し、日本中を騒然とさせた奈良県黒塚古墳、同じく三〇面以上出土した京都府椿井大塚山古墳の三角縁神獣鏡が初めて一堂に会することです。まさに画期的な展示といえます。さらに、奈良県ホケノ山古墳の出土鏡、奈良県島の山古墳・三重県石山古墳から出土した大量の石製品をはじめ、金銀の装飾品、様々な種類の埴輪など古墳時代の各時期を代表する一級資料が集まります。これらの品々は、まさにヤマト王権の成立・展開の様相を雄弁に語ってくれるものなのです。

この企画展・特別展を連続してご覧いただき、古墳と古墳時代への理解を深めていただくとともに、横浜の古墳と王墓をふくむ近畿地方の主要古墳とを比較的にみていただき、横浜の地域の古墳時代の様相を相対化していただければ幸いです。

人物埴輪（上矢部町富士山古墳）
（当館蔵）

画文帯神獣鏡（奈良・ホケノ山古墳）
（奈良県立橿原考古学研究所蔵）

今のくらしと昔のくらし

―企画展「くらしと道具の百科事典」を終えて―

子どもたちは、小学校三年生に初めて歴史の勉強をします。「私たちの町の移り変わり」とか「くらしの移り変わり」といった単元で、自分たちの住んでいる場所の「昔」やくらしの様子を、地図や写真を見たり、おじいさんやおばあさんにたずねながら調べていきます。今回の展示は、この子どもたちが初めて学習した「昔」を具体的に示してみようという意図から始まりました。

展示が始まると、博物館はいつもとは違った雰囲気でいっぱいになりました。普段は、大人の方がじっくりと展示資料を見る静かな落ち着いた雰囲気なのですが、今回は、見に来た方のほとんどがしゃべったり、体験したり、懐かしがったりと、とてもにぎやかになったのです。

展示は、企画展示室のほか、エントランスホール、体験学習室、そしてミュージアムショップで行いました。エントランスホールには牛車や小型三輪自動車「ミゼット」といった大きなものを展示しました。体験学習室では、ランプの明るさや石臼による粉挽き、お手玉・コマ・けん玉など昔の遊びが体験できるようにしました。ミュージアムショップでは駄菓子屋を再現し、駄菓子やおもちゃを販売しました。そして企画展示室では、かつての横浜市域の景観や、くらしに欠かせなかった道具の移り変わり、子どもたちの遊びやその様子を伝える写真などを展示しました。

展示の中心は高度経済成長期の前後、昭和三〇～四〇年頃で、いずれも子どもたちには経験のない「昔」です。自分で当時のくらしを経験した大人の方や、経験のない一〇～二〇歳代の若い世代、「昔」を勉強した子どもたちなど、みなさんがとても興味を持って見て下さいました。大人の方が子どもたちに自分の経験を伝えたり、子どもたちが道具の使い方を大人の方にたずねたり、あるいはお父さんが子どもを押しのけてコマ回しに夢中になったりする姿も見られました。それぞれが自分の感覚に合わせて展示を見てくださいました。とりわけ来館された方々が声をあげずにいられなかったのは、昭和三〇～四〇年頃に誰もが普段過ごしてきたくらしの空間である木造校舎の教室、ちゃぶ台のある茶の間、氷冷蔵庫のある台所などを再現したコーナーでした。

いったいどうして、これほど皆さんに興味をもっていただけたのでしょうか。

二〇世紀という一〇〇年間を振り返ってみると、くらしの姿は大きく変わったことに気がつきます。いくつか例を上げてみると、炊事の道具は、「はじめちょろちょろなかぱっぱ」といったコツが必要なかまどから、火加減の調節が自動化された電気やガスの炊飯器へと変わりました。たらいと洗濯板で行っていた洗濯は、洗濯機が自動でやってくれるようになりました。人が手間ひまかけた仕事を機械が担うようになったのです。このようなくらしの変化は、電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビといった三種の神器など、家庭電化製品が普及する昭和三〇～四〇年頃が画期となります。昭和三〇～四〇年頃は、便利さが具体的にくらしの中に入った時期にあたるのです。

私たちが今経験しているくらしは、この時期に比べると、はるかに便利になりました。携帯電話によって、いつでもどこでもコミュニケーションが成立します。インターネットを利用すれば、いながらにして世界中の情報を知ることができます。読み書きそろばんといった能力までも、ワープロやコンピューターが代わりをつとめるようになりました。一方で、田んぼや畑のある緑豊かな風景や、外で真っ黒になるまで遊んでいる子どもたちの姿、狭い茶の間での家族のつきあいなど、人が主人公であったはずのくらしの姿がだんだん希薄になり、それとともに環境や教育、人間関係のあり方など、新たな社会問題が顔をのぞかせています。

昭和三〇～四〇年頃は、経済的には貧しかったけれども、人々がよりよいくらしを求めて日々を過ごしていました。そして、便利さを享受しつつも、くらしの主人公はまだ人だったように思います。展示のアンケートには、昭和三〇～四〇年頃に対して多くの人が懐かしさやもう一度戻りたいという意識を抱いていることが記されていました。私たちがそのような意識を抱くのは、現在のくらしに失われてしまった何かや、問題となっていることを解決する糸口がそのころにあるからのように思われます。

もうすぐ二一世紀を迎えます。私たちはこれからどのようなくらしを営んでいくのでしょうか。そして四〇年後、二〇〇〇年のくらしを振り返ったときに、私たちは同じような意識を感じることができるでしょうか。それとも、昭和三〇～四〇年という時期にまだ思いを馳せているのでしょうか・・・。

研究余話

秀吉襲来

―豊臣方による関東侵攻の実態―

一、はじめに

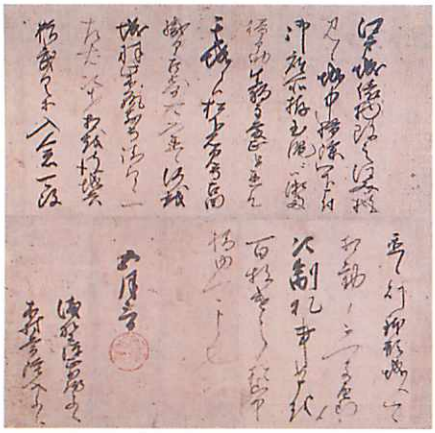
いわゆる小田原合戦については、豊臣方と北条方による、小田原城の攻囲戦や鉢形城（埼玉県寄居町）・八王子城（東京都八王子市）の攻防戦などを中心とし、多くの研究がなされてきました。ここでは豊臣秀吉の家臣である浅野長吉（長政）の行動に注目し、豊臣方による侵攻の一端について述べてみます。なお浅野長吉とは、秀吉の正妻おね（ねね）の妹を妻とし、早くから秀吉に仕えて各地を転戦し、若狭の小浜（福井県小浜市）八万石の城主から、文禄二（一五九三）年甲斐の府中（山梨県甲府市）二二万五千石の城主となり、いわゆる五奉行の一人となった人物です。

二、浅野らの部隊による関東侵攻

天正一八（一五九〇）年、天下統一を目指した秀吉は、三月下旬、箱根山を一気に突破し、四月六日、箱根湯本の早雲寺に陣を構えます。以後、七月五日に北条氏が降伏するまで、秀吉は小田原城を攻囲しますが、その最中、浅野と木村常陸介に部隊を編成させ、南関東に広がる北条方の支城を攻略するよう指示します。浅野らの部隊は、四月二六日に小田原を発し、鎌倉や大船の玉縄城（鎌倉市）あたりを侵攻し、翌二七日には江戸城を開城させています。

その後、五月上旬、浅野らは下総・上総方面（千葉県北・中部）に向かいますが、五月三日、秀吉は、浅野らからの要請を受けて「禁制」一〇〇枚を彼らの下に遣わしています（「富岡家文書」）。このことから、浅野らの部隊が多数の秀吉「禁制」を携えながら、南関東各地を侵攻していったことが想像できます。この「禁制」とは、戦乱の中で乱暴や狼藉を回避するため、ある軍勢の「統率者」が戦場となった地域に発給する文書です。小田原合戦でも秀吉の朱印が捺された「禁制」が関東各地に発給されたようで、現在、横浜市域を含む南関東で、秀吉「禁制」が数多く残されています。

注目されるのは秀吉「禁制」とともに、浅野自身による「この場所に御朱印（秀吉「禁制」）を取り次いだのであるから、以後の乱暴・狼藉は厳禁する」との書状が残っていることです。浅野は、秀吉「禁制」とともに、それを補う内容の自分自身の書状も各地に発給していたようです。おそらく浅野の書状は秀吉「禁制」に対する添状であり、秀吉「禁制」と浅野の書状がセットで出されていたと考えられます。現在、秀吉「禁制」に比べて、浅野の書状は各地にあまり残っていません。これには両者の文書の性格も影響しているかもしれません。秀吉の朱印が捺されている「禁制」は公的な性格が強いものであるのに対し、浅野の書状は花押（サイン）だけであり、公的な性格という側面では秀吉「禁制」よりもやや弱いのです。しかし一方で、秀吉「禁制」は事前に用意するためか、日付が「四月日」となっているのに対し、浅野の書状の方は「四月二九日」と具体的な日付まで記されており、部隊の動きを知る上で貴重な資料です。図はこれに基づいて作成した豊臣方の侵略経路です。



豊臣秀吉朱印状（富岡家蔵）

三、秀吉「禁制」の発給の意味

五月一二日、下総の土気城（千葉市）・東金城（千葉県東金市）を攻略中の浅野らの部隊に対し、秀吉はいくつかの指示を与えています。浅野らが攻略した城の周辺の村々から年貢として納入する夏麦については、攻略した城の留守居の者に任せて、当面はどこにも納入しないよう

百姓らに通達するよう命じています。さらに乱暴狼藉をする恐れもあることから、浅野らが直接村々に部隊を派遣することも厳禁しています。また秀吉は、浅野らに対して「禁制」の効力によって焼失を免れた村々の百姓からは、「禁制」発給の手数料として兵粮を進上させることも命じています（「難波創業録」）。兵粮とは戦時に将兵に与えられる食糧のことです。「禁制」を発給する際には、通常地域からその手数料を銭で徴収しますが、ここでは兵粮を進上させています。本来、秀吉「禁制」は地域の安全保障のために出されたのですが、場合によっては兵粮の確保という意図に関連したケースがあったのかもしれません。さらに別の資料で分かることですが、秀吉は、拠点である岩付城（埼玉県岩槻市）や鉢形城をなかなか攻略しない浅野らを叱責しています。すでに東北地方の平定まで考えている秀吉からすれば、浅野らの部隊の動きが気になっていたのでしょう。

四、江戸城の重要性

浅野らが江戸城を開城させて、下総・上総方面に侵攻するという経路をとった理由には、この時期における江戸城とその周辺地域の重要性ということがありました。

北条氏政（四代）は、天正八（一五八〇）年に家督を嫡子氏直（五代）に譲って隠居しますが、それ以降、江戸城とその周辺地域は、この隠居した氏政の支配下に置かれています。この時期の北条氏は、江戸城を拠点として下総・上総方面の領国支配を強化していたようです。浅野らの部隊が侵攻した地域はまさにここなのです

目の前の東京湾をはじめ、周囲に多くの大河川にも恵まれた江戸城を含む江戸の地は、北関東まで含めた広大な地域を後背地とする湊（港）の機能をもつことが想定できます。後背地とは湊の背後にある陸地のことですが、湊に出入りする物資の移動を通じて、湊となる地と密接な関係ができます。こうした関係が成り立つ背景には、陸上や海上・河川などの交通の発達があります。江戸城を開城させた浅野らの部隊が、下総・上総方面を経由し、利根川を越えて霞ヶ浦・北浦方面（茨城県南部）に侵攻したのも、江戸城が核となった関東における交通の発達とけっして無関係ではなかったかと思います。その後関東に入国する徳川家康ならずとも、江戸城を関東支配の拠点とするのは、まさに時代の流れであったわけです。

五、小田原合戦後の江戸城周辺

茶道の大成者で著名な千利休は、秀吉とともに小田原城を攻囲しています。六月二〇日、利休は茶道の弟子である古田織部に書状を出しています（「武蔵鐙の文」）。これによると、利休は、隅田川・筑波山・武蔵野・日暮里（東京都荒川区）・亀戸（東京都江東区）など、関東の名所を遠望あるいは見聞できる古田を羨ましがっています。と同時に、小田原周辺では、富士山を遠望するしか短歌の題材となる名所がないと利休は嘆いています。しかしながら古田は、江戸城の留守居として江戸城周辺にいたと思われ、周辺地域の支配を整えるため、それほど優雅な日々を送っていたわけではありません。

七月一三日、小田原城を開城させた秀吉は、すぐさま鎌倉や江戸城を経由し、東北平定のために会津（福島県会津若松市）に向います。七月二八日、秀吉は家臣たちに対して、岩付城天守閣所蔵文書）。これは秀吉が東北からの帰路を想定したものであり、このことから秀吉の軍勢に同行しないで、関東に駐留していた武将たちがいたことが想定できます。江戸城の留守居であった古田もこうした武将の一人です。彼らは家康の関東入国の前提となる支配整備に従事していたと考えられますが、具体的にどのようなことを行っていたのかを明らかにすることが今後の課題となります。浅野の行軍における江戸城の開城とその後の活動範囲は、江戸城が核となる次の時代の前提が、秀吉侵攻の段階ですでに存在していたことを示唆してくれるのです。

（曽根勇二）

天正18年における豊臣方の軍事行動

『小田原市史』（資料編・中世Ⅲ）の「本巻関係の関東の主な城郭」を原図として作成

富士両道一覧之図

現在でも東京の各地に「富士見町」や「富士見坂」という地名がみられるように、江戸の町からは西方はるかに富士山をのぞむことができました。丹沢山地の山々より一頭地抜きんでている高さと孤立した円錐形という美しい形状をもつ富士山に対して、江戸の人々が特別な親しみと崇敬の念を持っていたとしても不思議ではないでしょう。江戸やその周辺において、富士講と称される多くの講中が結成され富士山へ登っていったこともそうした意識の表れと考えられます。今回紹介する「富士両道一覧之図」も、そうした江戸の人々と富士山の関わりのなかで作成されたものです。

この絵は、安政六（一八五九）年に五雲亭貞秀が描いたもので、木版色刷の大錦六枚に江戸より富士山にいたる道筋を鳥瞰図風に表現しています。タイトルの「両道」とは、江戸より富士山へいたる二つの道の意で、具体的には東海道から登山の起点となる御殿場へいたる道と、甲州街道から同じく吉田へ行くルートを指しているとみられます。下部中央には江戸城が配置され、その左側には東京湾に面して江戸の町が広がっています。東海道は海沿いに上へ向かって伸び御殿場へといたります。途中には金沢八景・江ノ島など道中の名所・旧跡も記されています。一方、後者のルートは、江戸城から右へと進み、内藤新宿にいたり、玉川上水や小金井の桜などの名所を描きながら、上部へ進み吉田へといたります。また、江戸城から真っ直ぐに見上げる位置にあたる上部中央には、富士山がまわりの山々よりも一段と高く描かれており、江戸城と江戸の町が富士山によって見守られている一つの世界が巧みに表現されているように感じられます。

常設展示室探検

マジックビジョン

近現代の展示室には、「村のくらし」という展示コーナーがあり、明治三〇年代の農村部の暮らしをちょっと変わった映像で紹介しています。

大きなのぞき窓から見てみると、中には一〇分の一のスケールで作られた神社の模型があります。スタートボタンを押すと、その模型の中に子どもたちや農村の人々が現れ、そのころの習慣や遊びが織り交ぜられながらものがたりが展開します。

この装置は「マジックビジョン」といいます。模型の前に半分だけ光を透過する鏡（ハーフミラー）が据えてあり、ハーフミラーを通して見える奥にある模型と、ハーフミラーに映し出された人物の映像が合成され、あたかも模型のなかで人間が動いているように見えるのです。

常設展示室では、実物や模型のほか、さまざまな装置を駆使した展示が繰り広げられています。その仕組みを考えながら見学するのも、面白いかもしれません。

史跡散歩

畠山重忠の史跡を訪ねて
―鶴ヶ峰界隈―

鎌倉時代に活躍した東国の武士を代表する人物に畠山重忠がいます。彼は菅谷館（埼玉県嵐山町）に居を構えた土豪で、『平家物語』や鎌倉幕府の歴史書である『吾妻鏡』にその活躍が伝えられています。源平合戦の一ノ谷の奇襲作戦の際、自分の馬の前足を背負って崖を下りた話は有名です。怪力であるばかりではなく、音曲の才や土木技術をもち、好人物であると同時に確固たる独立心をもった東国武士の代表であったのです。元久二（一二〇五）年、幕府の北条時政から「鎌倉一大事」の知らせを受けた重忠は、百余騎で鎌倉に向かいますが、息子重保が殺されたことを知り、万騎ケ原で幕府軍と戦い一族と共に戦死したのです。

畠山重忠が幕府の大軍を迎え撃って戦死した鶴ヶ峰・二俣川の地には、彼に関する伝承をもった多くの史跡があります。それを訪ねてみましょう。

相鉄線の鶴ヶ峰駅を降り、旭区役所を目指します。区役所のわきには「さかさ矢竹」がありました。これは、重忠が討ち死にする直前に突き刺した二本の矢が根づき、毎年二本ずつ増えて、茂り続けたというものです。残念ながら現在はみることができません。区役所の裏側、鎌倉街道が帷子川を渡る地点には「首洗い井戸」がありました。重忠の首を洗い清めたといわれる井戸です。現在は標柱が建っているのみです。ここは川幅が広く、武士が鎧を頭の上にのせて渡ったことから「鎧の渡し」「越っ場」といわれてきた所です。区役所の裏側の越っ場橋を渡る手前には「首塚」があります。愛甲三郎季隆に斬られた重忠の首が祭られたところと伝えられます。現在は石製の塔と地蔵尊が立っています。厚木街道を挟んで区役所と反対側、交差点の奥まったところに「畠山重忠公碑」が建っています。重忠没後七五〇年を記念して、鶴ヶ峰と埼玉県川本村の有志が建立したものです。

区役所から厚木街道を北上し、国道一六号を越えて、鶴ヶ峰浄水場の方へ向かいます。浄水場の西に「駕籠塚」があります。駆けつけて来た重忠の妻である「菊の前」が、夫の戦死を聞いて自害し、駕籠ごと埋葬されたといわれる場所です。以前は浄水場の中に大きな塚がありました。さらに西方の薬王寺は重忠の霊堂になっています。境内には一族郎党一三四騎を埋葬したと伝える「六ツ塚」があり、回りには供養の地蔵尊が建てられています。重忠の命日には盛大な慰霊祭が行われます。さらに、薬王寺の北、谷戸の奥まった崖面から出ていた湧き水は「すずり石水」と呼ばれています。重忠が布陣した際、ここの水で墨をすったといわれています。

他にも、合戦の際に放たれた大量の矢が畑のようになったことに由来する「矢畑」、「越し巻き」などが水道道沿いに残っています。また、北条勢が数万騎の陣を構えたことに基づく「万騎が原」の地名があり、南万騎が原駅の東北方にある万騎が原第二公園内には明治二五（一八九七）年に建立された「畠山重忠公遺烈碑」が立っています。

重忠に関する伝承や史跡のすべてが史実ではありませんが、地域の人々が育んできた歴史遺産です。これらをめぐって、地域の歴史への理解を深めてみてはいかがでしょうか。

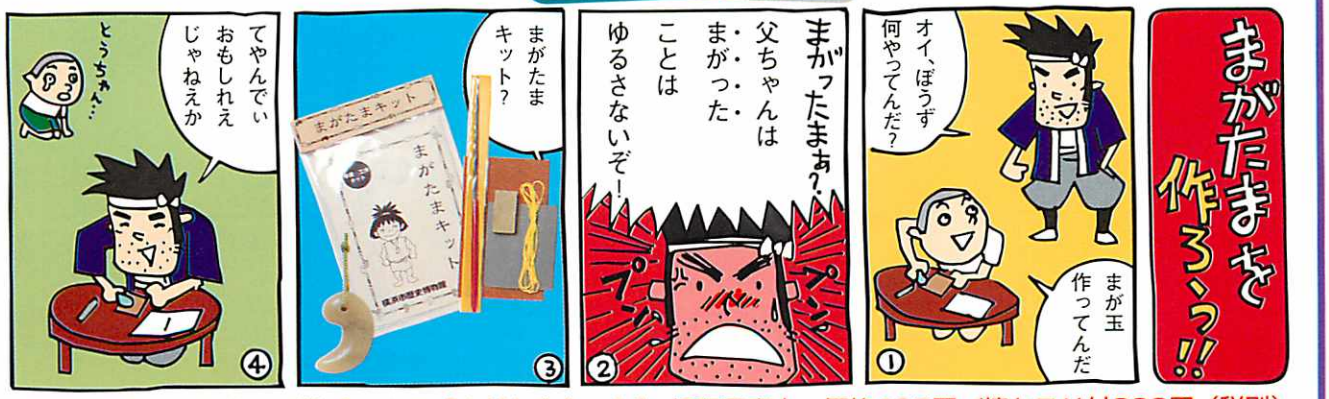
六ッ塚

畠山重忠公碑

駕籠塚

首塚

ちょいと ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time



ご家庭で、まが玉作りが体験できる「まがたまキット」。好評発売中　価格400円／棒ヤスリ付600円（税別）

INFORMATION

今後の企画展のお知らせ

◇企画展　古墳からのメッセージⅠ　横浜の古墳と副葬品
1月27日(土)～3月11日(日)
横浜市域には、90基余の古墳と100箇所余りの横穴墓群が発見されています。市域の主要な古墳・横穴墓群に関して、発掘調査で得られた成果を中心に紹介します。

◇特別展　古墳からのメッセージⅡ　大古墳展・ヤマト王権と古墳の鏡
3月31日(土)～5月6日(日)
「卑弥呼の鏡」との考えもある三角縁神獣鏡をはじめ、古墳から出土した鏡を中心に、京都大学と奈良県立橿原考古学研究所の調査・研究にもとづき、近畿地方の代表的な古墳出土の品々を紹介します。

???????知ってますか???????

―休憩室―

博物館に入って右手のスロープを上がった2階右側のスペースを来館者の休憩用の部屋として開放しています。

以前は喫茶室として営業していたのですが、その店が閉店しましたので、来館者の利便を考え、当面、休憩用の場所として利用していただいています。大小のテーブルに30席の椅子を用意し、牛乳やお茶・ジュースなどの自動販売機が設置してあります。

また、たい焼きやタコ焼き・焼きそば・焼きおにぎりなどもありますので、軽食やおやつをとることもできます。もちろんお弁当をお持ち込みいただき、ご自由にお食事していただくこともできます。

観覧後にコーヒーブレイク、ご家族でお弁当、おにぎり片手に展示図録、レポートをどう書こうかと悩む人など、休憩室でのみなさんの姿はさまざまです。いままで休憩室をご存知なかった方も、お食事の場として、また、ほっと一息入れる憩いの場として、ぜひお気軽にご利用ください。

横浜市歴史博物館●日誌●

（一九九九年一二月一日～二〇〇〇年一一月三〇日）

- 12月11･12日　体験学習「凧づくり」
- 12月14日　開館5周年記念「館蔵品の紹介展示」開催（1月9日まで）
- 12月25･26日　全館燻蒸のため臨時休館
- 1月22･23日　体験学習「紙すき」
- 1月29日　企画展「中世の梵鐘－物部姓鋳物師の系譜と鋳造」開催（2月27日まで）
- 2月6日　開館5周年記念特別講演会　平野邦雄「木の文化－出雲大社と伊勢神宮を中心に－」
- 2月12･13日　体験学習「まゆ人形づくり」
- 2月27日　歴史講座「土器作り教室」（3月26日まで連続4回）
- 3月23日　＜ふるさと横浜探検5＞三浦半島に残る中世の城跡探訪
- 3月25日　企画展「江戸時代のよこはま　都筑の村々－絵図・古文書で探る区域のすがた」開催（5月14日まで）
- 4月22･23日　体験学習「小田原ちょうちんづくり」
- 5月3･4日　体験学習「勾玉づくり」
- 5月16日　歴史講座「横浜の歴史」（7月23日まで連続11回）
- 5月25日　＜ふるさと横浜探検1＞国指定史跡大塚遺跡と登呂遺跡の探訪
- 5月27･28日　体験学習「ウグイス笛づくり」
- 6月2日　収蔵資料展「描かれた東海道」開催（7月2日まで）
- 6月10･11日　センター北まつり参加
- 6月24･25日　体験学習「土偶づくり」
- 7月20日　企画展「くらしと道具の百科事典－ちょっと昔を探してみよう」開催（9月3日まで）
- 7月29･30日　体験学習「風車づくり」
- 8月3･4日　体験学習「染めもの」
- 8月8･9日　体験学習「ぞうり編み」
- 8月11日　谷戸探検
- 8月12･13･26･27日　夏休みれきし教室
- 8月15･16日　体験学習「まゆ細工」
- 8月25･26日　体験学習「勾玉づくり」
- 9月28日　＜ふるさと横浜探検2＞江戸時代の神奈川宿探訪
- 10月6日　歴史講座「古文書解読教室」（12月15日まで連続10回）
- 10月7日　特別展「発見！巨大集落－大熊仲町遺跡と縄文中期の世界－」開催（11月26日まで）
- 10月8･9日　古代人まるごと体験講座
- 10月14･15日　体験学習「土鈴づくり」
- 10月26日　＜ふるさと横浜探検3＞よこはま事はじめ－野毛地区
- 10月28･29日　体験学習「土偶づくり」
- 11月3日　都筑区民まつり・青葉区民まつり出店参加
- 11月5日　特別展関連講演会　岡村道雄氏「縄文時代の集落と人々の暮らし」
- 11月11･12日　体験学習「勾玉づくり」
- 11月19日　特別展関連研究講座　坂上克弘氏「大熊仲町遺跡を掘る」
- 11月30日　＜ふるさと横浜探検4＞朝夷奈切通と鎌倉周辺の歴史散歩

編集後記

大塚・歳勝土遺跡公園で、一〇月、都筑区内の小学生三〇数人が、一泊二日の古代人体験をしました。手作りの貫頭衣で集合し、竹やぶから竹を切り出しての食器作りから始まり、勾玉作り、火起こし、栗をつぶしてのクッキー作り、赤米・黒米などの古代食作りをしました。夜は、竪穴住居でコンサートを楽しんだあと、就寝。最後まで元気いっぱいの古代人たちは、弥生のムラからたくさんのメッセージをおみやげに現代の町へ帰っていったことでしょう。二一世紀の企画展は、古墳からのメッセージシリーズで始まります。ご期待下さい。

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間
午前9時から午後5時まで（ただし、入館は午後4時30分まで）
大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

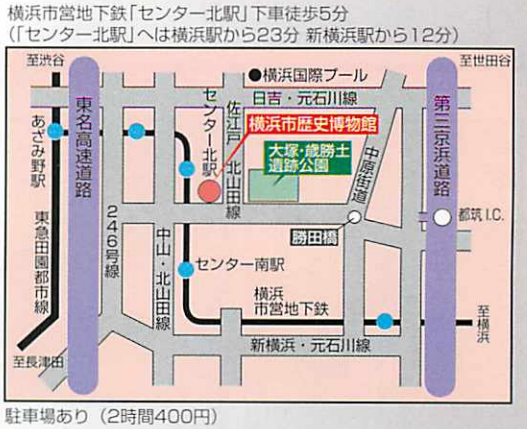
●休館日
月曜日、祝日の翌日、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区　分	個　人	団　体（20人以上1人につき）
一　般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。
◆第2・第4土曜日は、小・中・高校生は無料です。
◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳（療育手帳）」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図
横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
（「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分）



駐車場あり（2時間400円）
●インターネットホームページを開設しています。ご利用下さい。
http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/

横浜市歴史博物館ニュースNo.11／2000年12月1日発行
●編集・発行　財団法人横浜市ふるさと歴史財団
●印刷　株式会社神奈川新聞社出版局

横浜市歴史博物館
〒224-0003　横浜市都筑区中川中央1-18-1
TEL.045-912-7777（代表）FAX.045-912-7780